こたつ

原 宏一
Hara Kouichi

ベネッセ

こたつ

江苏工业学院图书馆
藏书章

原宏一
Hara Kouichi

ベネッセ

Benesse
ラテン語の「bene＝よく」と「esse＝生きる」からつくったのがBenesse(ベネッセ)です。私たちは、ひとりひとりの充実した生活や向上意欲のサポートをしていきます。

原 宏一(はら こういち)
1954年、長野県に生まれる。
茨城県に育ち、東京都を経て、千葉県在住。
バンドでギターを弾き、鮨を握るのが趣味。
著書として『かつどん協議会』(ベネッセ刊)
がある。

こたつ

1998年1月10日　第1刷印刷
1998年1月20日　第1刷発行

著　者　原　宏一
発行者　池田清隆

発行所　株式会社 ベネッセコーポレーション
〒206-88 東京都多摩市落合1-34
電話　ご注文・問合せ(0480)23-9233
編集(0423)56-0940

印刷所　大日本印刷
製本所　大口製本
©Kouichi Hara 1998 Printed in Japan
ISBN4-8288-1836-7 C0093　NDC913 194 208P
乱丁・落丁本はお取替えいたします
定価はカバーに表示してあります

目次

こたつ　5
町営ハリウッドムービー　119

装丁　原研哉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

こたつ

こ
た
つ

プロポーズしたら、黙られてしまった。こたつに腹ばいになったまま、美津子はじっとテレビを見やっている。晩秋にしてはやけに冷え込む十月の末。会社帰りに彼女がデパートの地下で買ってきた総菜で夕食をすませ、一服しているときだった。

「おれたちふたりなら、なんとかやってけると思うんだ」

ごろ寝しながらのプロポーズがまずかったかと思い、体を起こしてだめ押しを試みた。が、美津子はまだ口を閉ざしている。

「ほかにだれかできたのか？」

不安になった。出会って三年。たがいに住まいを借りているのももったいないからと、おれが彼女のアパートに転がり込んで三か月になる。が、それぞれの私生活には干渉しないルールになっていることもあって、彼女が夜遅く帰ってきても、こっちから理由を問い

ただしたことはない。
「ほかになんかいないけど」
やっと美津子が口をひらいた。リモコンでテレビを消し、物憂げに体を起こしておれに向き合うと、
「むずかしい家なのよ、うちって」
ため息をもらすように言った。
髪をメッシュに染め、小ぶりな顔が愛くるしい美津子は、傍目には遊び好きのおねえちゃんにしか見えない。けれど地元の金沢に帰れば、それなりの名家の娘だという話はきいていた。ところが、それなりどころか、じつは全国的にも名の知れた由緒正しい家元のお嬢様だという。
「それじゃ茶道とかやってんだ」
「茶道じゃないけど」
「華道か」
「ちがう」
「踊り？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ちがう」
「ほかになんかあったっけ」
「こたつ」
「こたつ？」
いまふたりで足を突っ込んでいる、やぐらの上から布団をかけて天板をのせたこたつ。その作法を極めたこたつ道の総本家、それが彼女の実家なのだという。
「こたつの作法かよ」
思わず吹きだした。こんなときに冗談はやめてくれ。
「冗談なんかじゃないわよ。五百年続いてきた日本の伝統芸道なんだから」
美津子がむっとする。
「てことは、こたつでおならしちゃいかんとか、そういう作法か」
「そんなんじゃない」
「足が臭いやつは入るなとか」
「ちがう」
「向かいの女にちょっかい出しちゃいかんとか」

足をのばして彼女のスカートに忍び込ませる。
「だからちがうの！」
怒らせてしまった。
茶道や華道ほど一般には知られていないが、とにかく、こたつ道総本家の跡取り娘といったら、その世界では大変な存在であるらしい。いまでこそ、わがままを言って東京でひとり暮らしをさせてもらっているが、いざ結婚ともなればお家の一大事。当代家元が認めた師範級の人物でないことには、まず花婿の候補にはなりえない。
つまりは、大学を中退して以来バイトを転々、牛丼チェーンで「並一丁！」とか言ってるフリーターなんて輩は、敷居もまたがせてもらえない。そういうことらしい。
「べつに隠すつもりはなかったの。けど、どうしても言い出せなくて」
憮然としているおれを見て、美津子は急に涙声になる。
「生まれたときから決められていたことなの。だから、それがどうしても嫌だったら、親子の縁を切るほかないの。けど、それはできない。いくら好きなひとと結婚したいからって、たったひとりの娘を、ここまで育ててくれた親と縁を切るなんて」
言葉に詰まってうつむく。

そんな美津子を見つめながら、なんだか奇妙な気分でいた。家業の問題で結婚が阻まれる。それはよくある話だし、それで彼女が苦悩する気持ちもよくわかる。ただ、その家業というのが、こたつ道だというのがどうにも解せない。そんな冗談みたいな作法はきいたことがないし、ましてやそんなものに家元がいるなんて、どう冷静に考えたところで信じられない。

これはひょっとして、プロポーズを断る口実なんじゃないか。ふと思った。こたつ道なんてものの存在を信じるよりは、そう考えたほうがよっぽど納得がいく。なりゆきで同棲してはいたけれど、しょせんおれは遊び相手のひとりだった。いつかは別れようと思っていたところに突然結婚話をもちだされて、あわてて出鱈目を口にした。そういうことなんじゃないか。いや、そうとしか考えられない。

急に腹が立ってきた。これでもおれは、ほんとうに本気だったのだ。ふたりの将来を真剣に考えて、満を持してプロポーズしたのだ。なのに、なのに。

「ようするに、おれが師範であればいいわけだな」

ちょっとした逆襲を思いついた。

「だったらおれが師範になってやるよ」

美津子が、えっと顔を上げた。
「結婚するからにはフリーター稼業から足を洗おう。そう思ってたところなんだ。だからこの際、おれが師範になる。それならなんの問題もないじゃないか」
「無理よ」
即座に美津子は首を振った。生半可な覚悟でなれるものじゃないんだからと首を振り続ける。
困ってやがる、と内心苦笑した。出まかせ話にその気になられちゃ、そりゃ困るだろう。だが、最初に言い出したのはそっちなのだ。さあどうする。じつは嘘でしたってまた泣くか。おれはサディスティックな気分になって、さらに続けた。
「やるまえから無理ってことはないだろう。そりゃ大学もまともに出られなかったし、生来のなまけものでもあるけど、でも、おれだって男だ。ああ、なってやるよ。師範だろうが痴漢だろうが土管だろうが、おまえといっしょになるためなら絶対になってみせる！」
「あっちちち」

反射的に足を引いた。焼けつくように爪先が熱い。見ると、靴下の先っちょに穴があいている。驚いてこたつ布団をめくると、ふつうならやぐらの上についているはずの熱源が、やぐらの下にある。しかも熱源は炭火だ。いわゆるあんかとでもいうのか、四角い窓のついた陶器のなかに真っ赤に炭火がおこっていて、どうやらそこにまともに爪先を突っ込んでしまったらしい。

ひりひりする爪先をさすっていると、

「馬鹿ものめが！」

いきなり物差しで叩かれた。

「襖の開け閉てもできん。寝ごたつの受け身もできん。めくりも、にじりも、さばきもできなければ、火床を足蹴にするようなまねまでしおって！」

これほどのど素人とは思ってもみなかったと、師範が呆れ返っている。

こたつ道師範、倉成宋善の指南所にいる。宋善師範は、金沢総本家の家元の弟、つまり美津子にとって叔父にあたる。

といっても、彼女が宋善師範の存在を知ったのは、東京にきてからのことだという。かつては兄とともに金沢の総本家で師範をつとめていた宋善だったが、まだ彼女が幼い時分

に兄と仲たがい。単身上京して独力で都内に指南所を開設し、今日に至っている。
「その意味で、あなたが稽古をつけてもらうには、うってつけのひとだと思ったの」
たまたま美津子は在京のいとこを通じて面識ができたが、金沢の総本家とはいまだに疎遠な関係にある。そこで、金沢の両親に知られることなくおれにこたつ道を修行させ、ある程度格好がついたところで両親に紹介する。美津子は、そんな抜け目ない段取りを思いついたのだった。
宋善師範の指南所は、本所吾妻橋のたもとにあった。外装の剝げ落ちた雑居ビルの最上階。やたらに遅いエレベーターを降りた目の前の引き戸を開けると、板張りの廊下に沿って和室が並んでいた。着物に半纏を羽織った女の子に、いちばん奥の部屋に案内された。どうなることかと恐る恐る襖をあけると、六畳ほどの座敷の真ん中にこたつが置かれていて、そこで宋善師範がごろ寝していた。
「とりあえず寝ごたつを拝見しよう」
おれを認めるなり、宋善師範は言った。彼がごろ寝しているところからして、それを寝ごたつと称しているのだろうと判断して、さっそく寝転んで足を突っ込んだら、あっちちちと冒頭のごとき不手際になってしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.